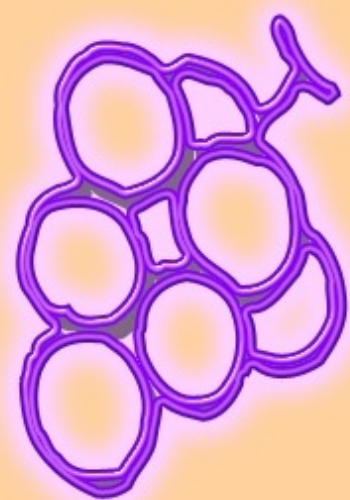




ト
ウ
キ

ま
と
め



ヤ
の

ッ
タ
ー



都
恵
司

理乃の副アカウントが炎上して数日。事態は収まったように見えた。しかし、情報が拡散するにつれていろいろな人間がこのことを知る。ある者はツイッターから。あるいは、ニュースサイト、ミクシーの日記、ブログ、ホームページ、掲示板、携帯ゲームのコミュニティなどから。情報源は様々で中には悪意のある解釈をしてそれを鵜呑みにして時折思い出したように、文句をつけてくる人もいた。

「はぁ」

理乃はまたため息をつく。理乃が酷いことを言ったのは確かだが、だからと言って理乃が見ず知らずの人から酷いことを言われる筋合いなどない。理乃に酷いことを言い返しても良いのは、良子だけだろう。隣で呑気にテレビを見ている良子をちらりと見た。動物的勘が良い良子は理乃の視線に気がついて、

「どうしたの。解決したのに何でため息ついてるの」と言う。

良子が携帯の画面を覗き込んできたものだから理乃は反射的に携帯を隠した。隠したところで、アカウントは知られているのだし、良子の携帯からも確認はできる。けれど、どうしても、理乃は良子に知られたくなかった。

「な、何でもないう。あっち行ってよ。お姉ちゃん、汗臭いんだから」

「えっ。そう？」

理乃の詭弁を真に受けて良子は首を傾げつつ自分を臭いながら風呂の方へ向かった。理乃はクッキーをかじりつつ良子を眺めながら、ぼそっとつぶやいた。

「世の中の人々が、みんなお姉ちゃんみたいなのだったら、扱いやすいのになぁ」

しかし、そんな世界は一瞬で崩壊するだろう。良子のように単純な人間ばかりだとすぐに戦争が起こりそうだ。止める人もいないだろう。

「うーん。やっぱ嫌だ」

良子が風呂場に消えたのを見計らって理乃は再び懐から携帯を取り出した。とりあえず文句を言う人には、適当に謝って火種は消しておくのが一番だろう。面倒くさいがここで放っておくと、さらに面倒くさいことになりかねないからだ。G,0と入力するだけで、「ごめんなさい。反省してます」と自動的に変換されるようになった。

「良子ちゃん。理乃ちゃん。暇？ たぶん暇だよ。ご飯作るの手伝って」

母に呼ばれた。件の炎上件を話してもまったく理解できなかった母だ。その後始末について助言をもらおうにも貰えないだろう。

「はぁい。ちょっと待って。お姉ちゃんはお風呂入ってる」

理乃は適当に謝った文章を投稿して、携帯をポケットに滑り込ませた。

「何すればいいの」

「そうね。玉ねぎのみじん切りをお願い仕る」

「つかまつるって、何時代？」

「さぁ？ すっごい昔でしょ。歴史なんて勉強したのも昔のことだから、忘れちゃった」

「……自分で調べるよ」

理乃は玉ねぎのみじん切りの作業に集中した。まず二つに分けて縦に切り込みを入れる。間隔を狭くすることでこまごました欠片になる。

「ふふ」

と母が笑った。何故玉ねぎを切っているだけなのに笑うのかと理乃が訝っていると、
「みじん切りひとつでも性格が出るものなのね。そう思うと可笑しくって。理乃ちゃんはきちっとした性格で何でもちゃんとしないと気に済まない感じの切り方よね。完璧主義者。今度良子ちゃんにもみじん切りさせるから、見ると良いわ。理乃ちゃんからしたら、これはみじん切りじゃない！ っていう切り方をするから。お父さんはねー、途中まではちゃんとするんだけど、後半がね。投げ出しちゃうの。」

お母さんは、どうなの？ 理乃はニンジンのみじん切りしている母のまな板をのぞき込んだ。
「ふーん。お母さんは、普通、ね。でも、これくらいが食べるのにも炒めるのにも丁度よさそう」

「みじん切りのキャリアが違いますから」

包丁を持って決めポーズをとる母。

「何やってんの？」

風呂上がりの良子が牛乳を求めてキッチンへ来た。コップになみなみと注ぎながら聞く。

「「みじん切り」」

「夕飯何？」

「「炒飯」」

「そう」

良子は牛乳を飲みながらキッチンから遠ざかった。炒飯にはあまり良い思い出がない。
「お姉ちゃん。逃げて行ったよ」
「もうほとんど作業は終わったし、後は炒めるだけだから。前にねー。炒飯を良子に作ってもらったんだけど」

「あー。あの野菜炒めと味のついたご飯！ あれお姉ちゃん作だったんだ」

「それ以来、炒飯作るのはあんまり手伝ってくれなくなっちゃった」

野菜炒めと味のついたご飯。

それは、数ヶ月前に秋野家の食卓に並んだ夕食である。今思えば、良子と母の様子がおかしかったように思う。カレーの具ほどのかくかくした野菜と中華風に味のついたごはんがお皿に並べられていたのを覚えている。変だとは思いながらも作ってもらっているのに文句は言わず食べた記憶がある。

「あれ、みじん切りっていうレベルじゃないよ。角切りよ」

「今度、お姉ちゃんに教えてあげて、理乃ちゃん」

それはなんて難しいことなんだろう。今日の夕食にはちゃんとした炒飯が並んだ。

夕食後、風呂に入って自室でくつろいでいた理乃はいっそ「のりの lackingKIA」のアカウントの方をボットみたいにしてしまおうかと考えていた。どのみちこのアカウントでつぶやくこともあまりない。しかし、それはどこか逃げているような気がして、躊躇われた。では、どうすればあらぬ誤解やゆがんだ解釈を避けられるというのだろうか。ここ一週間で正義感の強い短気な関西人がとても嫌いになっていた。悪気はないのかもしれないが、「われ」とか「～やねん」とか「しばいたるか」とか理乃には聞きなれない言葉で話すからだった。彼らは一体どうしてあのような言葉遣いで話すのだろうか。はなはだ疑問だった。

狭いベッドを右端から左端、左端から右端へごろごろと転がりながら考える。七往復ぐらいしたときだった。理乃は左端から床に落ちた。

「……いたっ」

頭を少し打ったようだ。起き上がりながら、目の前で電球マークが光るのを見た。逃げない方法をひとつ思いついた。

要は自分で事実をまとめておけばよいのだ。そして、一面だけ一部分だけしか知らないで文句を言うてくる奴には、リンクを送ればいい。きっとその方がいちいち謝るよりもずっといい。

ブログが良いかな。でもそのためだけにわざわざ開設するほどのものかな。ホームページを作るのも大仰だし。これだ！ という手段には思えない。理乃はまたごろごろし始めた。そしてわざと落ちてみた。今度は受け身をとったので頭は打たなかった。そして、ひらめいた。

「トゥギャッターにまとめておけばいい……のかも？」

この方法なら、わざわざ新しくアカウントやらなんやら手続きをしなくてもツイッターのアカウントをそのまま利用できる。そしてこれまでの発言を一か所にまとめることができる。「のりの lackingKIA」アカウントは始めて一週間経っていないが、最初の方の発言は謝罪とRTによってだいぶ流れてしまっていた。

早速、深夜皆が寝静まってからパソコンを起動し、一か所に炎上し始めた言葉から、謝罪の言葉までを並べた。リンクをコピーしてプロフィール欄に保存する。これで携帯からもコピーしてリンクを張れるようになるだろう。一息ついて理乃はブラウザから履歴を消去して、電源を切った。

「これでよし、と」

それ以来、ろくに事情も知らないくせに突っかかってくる人には、そのリンクでリプライを送ることにしている。リンクには次のような言葉を添えて。

【これが、一部始終です。全て読んでから、ご意見お聞かせ願います】と。

そのリプライにケチをつける人はほぼいなかった。リンク先へ飛んで、まとめられたものを読めばわかる。「一部始終」というようにその話はもう、数日前に終わったことだったから。

まとめのトゥギャッター

<http://p.booklog.jp/book/33386>

著者：都 恵司

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/123miki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/33386>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/33386>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.